

THE BUNGEISHICHO

文芸思潮

Document

Document

破壊が続くパプアニューギニアの森林

内田道雄

赤い巡礼チベット・ファイル 竹内正右

2021
春号

長篇小説

亜細亜二千年紀

五十嵐勉

第一部亜熱帯へ 第四章ガダルカナル

神話紀行

「鳥と蛇」を追って 山本悦夫

百期百会

野坂昭如／深沢七郎／石原慎太郎 岳真也

第79号

「鳥と蛇」を追って

山本悦夫

序章 ガルーダ

まず、ガルータという言葉ですが、この言葉を聞いたことのある人がどれくらいいるでしょうか。

ガルータは、ヴィシヌ神というヒンズー教の神様を乗せて飛翔する、鳥の姿をした神様です。鋭い嘴を持ち鷲のような姿をした巨鳥を想像していただければよいのではないかと思います。

ヒンズー教は、言うまでもなくインドで生れた宗教です。ヒンズー教とともにインドで生れたガルータは、遙遙とインドネシアまで旅してきました。そのガルータの名前を借用してインドネシア政府は国营航空会社の社名にしました。そればかりではなく、政府機関の紋章、紙幣にも

ガルータが印刷されています。

インドネシア人の九割はイスラム教徒だといわれています。この世界最大のイスラム国家が、ヒンズー教の神様を重用しているのは妙なことはありませんか。偶像を排斥するのが、イスラム教です。自然宗教ないしは多神教を徹底して排斥し（それ以前のアラブ人は偶像を崇拜し多神教を信仰していました）、ごく最近タリバンがバミヤンの石仏を爆破した例があるように、偶像の崇拜は許されるはずがないのです。

インドを旅立った神の鳥、ガルータがさまざまなき事を経験しながら最後に辿り着いた南の島がバリ島で、この島にはまるでヒンズー教の神様の国のようにガルータが群



鳥神ガルータ

れ住んでいます。ところが、私たちの日本にもガルータが飛来し、住み着いているのが観察されるのです。ガルータがインドを旅立って、辿り着いた南の果てがバリ島であるとするれば、東の果てが日本列島です。そして、この辺境の地で、ガルータは生れたままの姿で、あるいは姿を変えて力強く生き永らえています。

第一章 ガルータの誕生

インドの古典に『マハーバーラタ（大いなる戦い）』と『ラーマヤナ（ラーマ王伝）』という二大叙事詩があり

ます。ギリシャ神話に詳しい人は多くても、インドの『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』について知識のある人は限られているようです。これは、明治以来、わが国では西欧中心の教養を優先させる教育の流れがあったからだと思います。

『マハーバーラタ』は前十八巻、十万詩句からなり、ギリシャの有名な古典叙事詩『オデッセイ』と『イリアド』を合わせたものの約八倍の大きさで世界最大の叙事詩といわれています。それより少ない『ラーマヤナ』でさえ二万四千の詩句から成っています。この二つの叙事詩は英雄物語としては、よく『オデッセイ』、『イリアド』と対比されて語られますが、両者には決定的な違いがあります。

『オデッセイ』、『イリアド』などはキリスト教に主役の座を奪われて、今では宗教書としての役割は果たしていません。砂漠で生まれた一神教（ユダヤ教、キリスト教、イスラム教）は、もともとユダヤ教に起源を持ち、アラビア半島、西アジア、アフリカ北東部に住みセム語を話す民族の宗教でした。ユダヤ教の教典『律法』、『預言者』、『諸書』は、キリスト教では『旧約聖書』と呼ばれ、ヘブライ語で書かれています。イエス・キリストによって神との新しい救いの約束がなされ、それを記述したのが『新約聖書』です。新約聖書はコイネー・ギリシャ語で書かれたということがもあり、地中海世界に急速に広がっていききました。そしてロー

マでは、皇帝崇拜や多神教のギリシャやローマの神の祭り
は行われなくなり、ゲルマンの世界に広がっていったキリ
スト教は、今ではヨーロッパの宗教といってもよいほどの
ものになりました。

一方『マハーバーラタ』と『ラーマヤナ』は、今でも
インドやその周辺国の民衆の心の中に生き続け、ヒンズー
教の教えとして宗教心の支えとなり、民衆の行動の規範と
なっています。『マハーバーラタ』の説話の中には仏典と
共通するものがあり、わが国でも『今昔物語』の中の一角
仙人、従山来王物語などとなっています。『ラーマヤナ』
はさらに分りやすい形でアジア諸国に伝わり、東南アジア
諸国ではそれぞれの言葉への翻訳や新しい物語が作られま
した。中国には『羅摩衍那』、『羅摩衍拏』などと漢訳して
伝わりました。日本では、平安朝の『宝物集』に説話のい
くつかが収められています。そればかりではなく、後ほど
述べることとなりますが、『マハーバーラタ』や『ラーマー
ヤナ』に登場する人物（神々）は日本風に変貌して寺院な
どに祀られているのです。

インド神話、ギリシャ神話、北欧神話は言うまでもなく
印欧語族に属する神話でありますので、これらはその起源
を同じくしています。ジョルジュ・デジメル氏は前世紀の
半ばまでに、印欧語族の神話の構造は、祭司、戦士、生産
者の三階級の社会構造を正しく反映していて、印欧語族の

共通文化に遡るといふことを突き止めました。そして吉田
敦彦氏や大林太良氏はその理論を日本神話に適用し、比較
分析することによって大きな成果をあげています。

印欧語族に属するヨーロッパ人が何故、本来信じていた
多神教を捨てて中近東のセム族（ユダヤ人、アラビヤ人等）
が生んだ一神教に改宗してしまったのか、不思議な感じを
持たれる向きもあるかと思いますが、熱帯雨林に覆われ
た南の島国のインドネシアが多神教のヒンズー教ないし仏
教を駆逐し、砂漠の一神教であるイスラム教の社会に変化
したことを思うと、砂漠に生まれた一神教の伝播力がいか
に驚異的なものかということに気付かされます。

さてガルータの誕生ですが、そのいきさつが『マハーバー
ラタ』の始めの部分に出てきます。それによると、ガル
ータは大聖仙カシユヤバとヴィナタの間に生まれた猛禽類の
鳥と人間のハーフのような神鳥とされています。ガルータ
の父親カシユヤバの第一夫人カドゥルは、実はヴィナタの
実の姉ですが、たくさんの頭を持つ千人の息子ナーガ（蛇）
を生んでいます。

姉のカドゥルの卵が孵り、蛇が誕生した時に、ヴィナタ
は自分が生んだ二つの卵は孵る様子がないものですから、
恥ずかしく思い、一つを割って調べてみたらまだ成長半ば
の男の赤ん坊が入っていました。成長半ばで不完全な姿の
まま世に出たこの息子アルナは母親を呪いつつ天に昇り太

現れるのです。

ここでその時現れた白馬の色について賭けをしようとか
ドウルがヴィナタに持ち出します。負けた方が勝った方の
奴隷になるという条件の賭けです。ずる賢いカドゥルは、
千人のナーガ（蛇）の息子達に白馬の尻尾となるように命
じました。白と答えたヴィナタは、黒い尻尾の馬を見て賭
けに負けたことを認め、姉のカドゥルの奴隷となることに
なりました。

やがて時通り、もう一つの卵から巨大なガルータが生ま
れます。その姿は太陽のように輝き、火の神アグニのよう
に燃え、大海原のように無限の力を持ち、たちまちのうち
に巨大な鳥となり風神ヴァーユのように天空に翔け上がっ
て大音声を発しました。神々はガルータを恐れて賛辞を述
べ慈悲を請います。ガルータは自分を恐れている神々を見
ると、体を縮めて小さく姿を変え太陽神スリヤの御者をす
る兄のアルナを背にして母のもとに飛立って行きました。

ガルータが母のもとに行き着いた時に見たのは姉のカ
ドゥルの奴隷になった母ヴィナタの姿でした。次にガル
ータは、カドゥルに命じられた母のために千人のナーガ（蛇）
を背に乗せて海底の蛇王の都に行くこととなります。ナー
ガの言いなりに従い飛んでいる途中、ガルータは母を何と
かこの苦しみから救いたいと思ひ、ナーガにたずねます。
ナーガはあなたがアムリタ（甘露）を取って持つてくれば

「鳥と蛇」を追って

陽神の御者となりましたが、もう一つの卵は後に鳥類の王
ガルータとなり蛇類最強の敵となりました。

その後、アスラ（悪魔―仏教では阿修羅）との戦いに疲
れた神々が何とかアムリタ（甘露）を手に入れたい、アム
リタを口にする事によって不死の身になりたいと話し
合っていました。それを見たヴィシユヌがブラフマンに相
談して、アムリタを作り出すことになりました。その方法
と言うのは、亀の背中にマンダラ山を載せ、アスラと神々



がマンダラ山に巻きつ
けた蛇を綱引きすること
によって海をかき混ぜる
ことでした。これが有名
なヒンズー教の乳海攪拌
の神話です。こうして攪
拌された海からギー（イ
ンド料理には欠かせない
良質のバター）が湧き出
て、その中からラクシュ
ミー（ヴィシユヌ神の
妃）、ソーマ（神酒）、月、
白馬などと一緒にアムリ
タ（甘露）を押しいただ
いた医療神ダンタワリが

バリ島の鳥神ガルータ

母親は奴隷の身分から解放されるだろうと答えました。

幾多の苦難を乗り越えて飛翔を続け、遂に天界に達したガルータは、そこでも神々の激しい抵抗にあいますが、それに打ち勝って最後の守りについていた二頭の大蛇を粉々に引きちぎりアマリタを手に入れます。ガルータは帰る途中ヴィシユヌに会います。アマリタを自分の物とせず大事に持ち帰るガルータを見たヴィシユヌはそれに感銘を受け、何か望みがあれば叶えてあげようと話し掛けました。ガルータはいつもあなたの側にいたい、そしてアマリタを飲まなくても不死身になりたいと答えました。ヴィシユヌがそれを叶えてやろうと約束すると、ガルータは自分もあなたの望みを叶えてあげたいと返礼のつもりで言いますと、ヴィシユヌはそれでは自分の乗物を引いて天空を駆け廻ってもらいたい、そうするといつも自分の側に居ることが出来るだろうと答えました。以来ガルータはヴィシユヌの乗物となります。

ヴィシユヌとの約束はありますが、その前に母を奴隷から解放するという仕事があります。ガルータが母のもとに急いでいきますと、アマリタを守護する役目のインドラが現れ雷電を投げつけます。難なくこれを避け、黄金に輝くその羽を一本抜いて放ると、あまりの美しさに神々は感嘆して今後はスパルナ（見事な羽の鳥）と呼ぼうと声をあげ、インドラは望みどおりナーガをガルータの食べ物にするこ

とを約束します。

こうしてアマリタはナーガの元に届けられます。クシャ（聖なる葉）の上に置かれたアマリタの壺を見て狂喜するナーガは、ガルータの母親ヴィナタを奴隷の身から放ちました。そして身を清めアマリタを口にする儀式を行おうとしていると、突然インドラが現れアマリタをさらって天界に消えて行きました。ナーガは慌ててアマリタの滴りでも付いてはいないかとクシャの葉を舐めていくうちに舌の先が二つに割れたのだといひます。

母カドゥルの命に従わなかった罰としてナーガは、蛇供^{ミコ}で犠牲になる運命を負わされます。ナーガの中でとりわけ賢明な長兄シェーシヤは、これを嘆いてヒマラヤ山中に入り苦行を続けました。心を動かされたブラフマーは、シェーシヤを地底に送り大地を支えるように命じます。こうしてシェーシヤはアナンタ（無限）と呼ばれる竜王になりました。またシェーシヤと並んで賢明なヴァースキは乳海攪拌の支え綱となりこの大事業が成功した時にブラフマーから邪悪なナーガ（蛇）だけが滅び善良な蛇は生き延びるがよいという言葉ももらいました。

マハーバーラタの主要な部分は、一般的に紀元前二千年頃から二百年頃にでき上がったといわれています。マハー（偉大なる）・バーラタという題名が意味するように、バーラタ族の主要な部分には、一般的に紀元前二千年頃最も古い例だと思われまます。(1)(2)の考え方については、アジア世界のみならず広くヨーロッパ世界にも広がっています。

*マハーバーラタは、日本語の訳本は極端に数が限られています。私は、日本語では主として三一書房刊M・N・DUTTのサンスクリットからの完訳版といわれる山際素男編訳「マハーバーラタ全七巻」を参考にしました。短いものでは、田中嬭玉氏と友人だった奈良毅氏との共著、第三文明社のレグルス文庫の「マハーバーラタ上中下」も読みましたが、これはC、ラージャ・ゴパールチャリーのダイジェスト版であり、多くの重要なエピソードは省かれて、バーラタ族間の戦争の経緯が中心になっています。

第二章 ルーブル博物館・グデア王の台付杯のモチーフ

パリに仕事があったので、そのついでに九月一日、二日と続けてルーブル美術館を訪ねました。前にグデア王のゴブレット（台付杯）のことを述べましたが、この台付杯を確かめに行くつもりでした。グデアは、交易で繁栄していたシメール時代の都市国家ラガシユの王です。十九世紀以降長い間をかけてフランスが発掘してきたラガシユの発掘品は、ルーブル博物館に多数収蔵されており、この台付杯のほかにも三十体ほどのグデア王自身の像などもその中

ラタ族の間で実際に争われた戦争が主題になっています。その中には、ヒンズー教の聖典として最も重要でかつ世界の人々にもよく知られた七百の詩句からなる戦いのクライマックスの場面を描いた「バカヴァッド・ギーター（神の歌）」がありますが、本題とは直接関係がないエピソードもまた数多く含まれています。内容的に矛盾した挿話もありますが、それは字を読めない吟唱詩人の群れによつて各地の伝承、神話、民話などが何百年の間、どんどん取り込まれていったからです。それを文字化したバラモン達も各地の文字で記録していったものですから無数の写本が流布しています。

右に大略を述べたガルータとナーガの物語の中にも、前後で矛盾したエピソードもありますが、(1)ガルータとナーガは切っても切れない間柄ではあるが対立関係にあること(2)ナーガは地底で大地を支える役割を持つこと(3)ガルータがヴィシユヌの乗物となったことが重要で、気付かないうちに少なくとも我々アジア人の深層心理や宇宙観に大きな影響を及ぼしています。

(1)の「鳥と蛇」を対立概念として捉える考え方は「マハーバーラタ」と「ラーマヤナ」が成立する以前から中近東に古くからあったようで、メソポタミアではすでにシメール時代のグデア王の犠牲祭のゴブレット（台付杯）に、絡み合った蛇の両脇に立つ鳥らしい図柄が表わされていま

に含まれています。

残念ながらメソポタミア美術の展示室は閉鎖されていて、グデア王のゴブレットは見る事ができませんでしたが、写真でグデア王の台付杯の図柄を見ますと、絡み合った二匹の蛇の両脇に獅子の頭を持った鳥のような動物が配されています。先回述べましたように、ガルーダの追跡の旅で私が興味を持ち続けてきたのは、この図柄のモチーフなのです。そして、その間、このモチーフがギリシャ神話にも取り入れられていることが分かってきました。

ギリシャのペロポネソス半島にエピダウロスという名の遺跡があります。ここは、ギリシャ神話のアスクレピオスという医師の神の聖域とされています。病人や神殿の参拝者が宿泊する宿だけではなく、リハビリテーションのための訓練所、浴場、音楽堂、円形劇場などの跡もあり、医療の町として賑わっていた当時の様子が想像されます。昨年の夏、この遺跡を訪れましたが、二千五百年前に栄えたこの施設が、最近世界的にファッショントなっている癒し志向の保養所などに劣らない規模の大きさを知って驚くばかりでした。岩肌が露出した山が目立つ地形の中で、ここばかりは松の大樹が緑の陰を作っていました。

この遺跡のミュージアムには、医師の神アスクレピオスの像があります。アスクレピオスの持ち物は、カドゥケウスの杖で、いつも手にその杖を持っています。カドゥケウ



カドゥケウスの杖

スの杖は、神々の使者を務めるとされるヘルメスもこれを持っています。カドゥケウスの杖にはグデア王の台付杯の意匠と同じように、二匹の蛇が絡み二枚の鳥の羽がついています。

グデア王の守護神をニンギシュジダと云いますが、この神につき従っているのが、二匹の蛇が絡んだカドゥケウスであり、この神は水星と同一化されて、医師の神とも見なされたことをみると、やはりこの二匹の蛇が絡んだモチーフはメソポタミア起源であることが分かります。

また興味深いことには、中世のヨーロッパで流行り、近代化学の先駆となったといわれる錬金術は「ヘルメスの

術」とも言われるように、錬金術のオカルト的図像を見ると蛇（龍）と鳥が対極の原理として、しばしば描かれています。これは、ギリシャ神話のヘルメスのカドゥケウスから来た思想ですが、さらに遡れば紀元前二千数百年前に、先に述べたシュメールのグデア王の台付杯に表現されたモチーフに既に現れていると考えられるのです。話は逸れますが、ヘルメスはローマ神話ではメルクリウスとなり、英語では水星と水銀を意味するマーキュリーという単語になりました。水星と水銀は錬金術に深いかわりがあることは、周知の通りです。

鷲と蛇を対立概念とするエピソードはギリシャ神話の題

ヘルメスの杖



材として数多くあります。空を飛ぶ鷲がオリュンポスの神々の支配者、天空神のゼウスに属しているように、ゼウスの妻ヘラには蛇が付き従っています。鷲は天空に属し、家父長的秩序のギリシャの男性原理、蛇は水と大地に属し、トロイの女性原理を象徴するとも言われています。この相克する宇宙の原理、鷲と蛇の象徴主義はグデアの台付杯よりもさらに古い時代からアッシリアに存在したということが、シュメールの文明を見て分かってきました。

対立者としての鷲と蛇の象徴主義は、ペルシャのゾロアスター教（拜火教）のゾロアスターを主人公にして書き上げたニーチェの「ツァラトゥストラはかく語りき」にも現れていて、西欧の近代思想に大きな影響を与えてきました。ニーチェの功績は、従来の伝統的西欧思想を掘り返すことによって、その暗部に潜む東洋的な要素を日の下に晒しだすことにおいて意義があったのだと思われれます。

*その後、グデア王のゴブレット（台付杯）は何回か見せてもらいました。現在、ルーブル美術館リシュリー翼の古代オリエント展示室に現物が陳列されています。

第三章 アイランドには、鳥と蛇が満ち溢れていた

パリで仕事を終えたあと、アイランドに足を伸ばしてみました。若い時と違って仕事に追われることもないの

で、のんびりと旅ができます。アイルランドは、農耕地が狭く、居住地が分散して強力な政治組織が育ちませんでした。したが、ローマの支配を受けずにすみました。そのためなのか、アイルランド人は今でもイギリス人と異なり、ラテンの特徴とされる組織的、論理的、実質的な精神には乏しく、その対極にある民族性を持っているといわれています。

アイルランドの独立運動はケルト人としての誇りと伝統を守る戦いだったといわれています。混血やいろいろなこととはあったでしょうが、アイルランド人はケルト人としての誇りを持って生きています。それでは、一体ケルト人とは何者なのでしょう。

紀元前千二〇〇年頃からアルプス山脈の北西に住んでいた人達をギリシヤ人はケルト人と名付けました。つまり、今私たちが西欧と呼んでいる地域はケルト人の土地であり、ケルト文化が支配していた時代があったのです。ローマ時代には、大陸のケルト人をガリア人と呼ぶようになります。ガリアの地から、アイルランドへのケルト人の移住は前六世紀頃から始まっていましたが、最後にアイルランドに到来した人たちを、それまでに移住してきたケルト人と区別してゲール人と云っています。(この辺りは大利貴彦氏の労作アイルランド史をご参照ください)

アイルランドで、ゲール語をしゃべる人は二〇%以下だそうです。英国との違いを強調して国家意識を高めるたその旅でした。

アイルランドの荒野の果てにある西海岸の沖に浮かぶアラン諸島の古い墓場なども廻ってきましたが、冷たい雨の中に野晒しになっている十字架は、円環に囲まれている、普通私たちが見慣れている磔刑の十字架のイメージは感じられません。ケルト人は十字架を異教の徴として受け取り、徐々に受け入れていったのだらうともいわれています。十字架の表面にしても、蛇が絡んだような組紐文様が浮彫りされていて、不思議な雰囲気を感じさせています。

バイブルの「創世記」に、狡猾な蛇にそのかされてイブが最初に禁断の果実を食べ、次にイブはこの実をアダムにすすめたという有名な挿話が出ています。キリスト教の原罪という思想はこの挿話から出てきたわけで、それ以来蛇は忌み嫌われる対象になっています。それなのに事もあろうに、ここではキリスト教の十字架の墓標に蛇を連想させる組紐文様が彫られています。これは興味深い眺めでした。

ダブリンの町には、四〇〇年も前に創設されたダブリン大学、トリニティー・カレッジの図書館にケルト美術の至宝と云われる「ケルズの書」が一般公開されています。

めか、アイルランド政府は、第一公用語をゲール語と決めました。首都ダブリンから島を横断して、西の果てのゴールウェイまで鉄道で行きましたが、駅には英語で表記したゲール語の地名を上、英語の地名を下に書いたボードが掲げられています。だが、タクシーの運転手は、ゲール語は小学校で必須科目なので習ったが、流暢には話せないと言りました。

それでも、アイルランドに足を一歩踏み入れると、そこには明らかに大陸とは違う空気が漲っています。映画の「タイタニック」の画面に流れるあのテーマ音楽のメロディーのように安らいだ雰囲気を感じられ、ダブリンの夜は遅くまで賑わっています。確かにこれはパリの夜の孤独な風景とは違います。これをアイルランド風というのかも知れません。

ケルト人はゲルマン人やローマ人に圧迫されて大陸から移動してきたのですが、ローマ軍はアイリッシュ海を渡れず、そのためイギリスと違って古典ラテン文化の洗礼を受けずにケルトの文化を比較的よく保存することができたのです。

ヨーロッパの文化は、ヘレニズムとヘブライズムの二本の柱で特色付けられるといわれますが、実はその底にはケルトの文化が潜んでいます。大陸やイギリスがラテン文化にすっぱり覆われてしまった中であって、アイルランドでページを開いた原本が、ガラスの箱の中に嚴重に展示されていますが、書物のページを壁画のように拡大して照明を当て、いつも混み合っている観光客に見やすいようにする工夫もしてあります。「ケルズの書」には、マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝の四つの福音書が収められています。その写本装飾はケルト的伝統とラテン的伝統が結びついた格好の例だとされています。

具象的、自然主義的表現が特徴的なラテン美術に対して、その対極にある抽象的、超自然的な装飾表現がケルト美術の特徴だとされていますが、このケルト美術の特徴は、墓標や写本だけではなく、国立美術館に展示されている金銀細工のブローチ、首輪、腕輪、または兜や壺にも見られます。息苦しいくらいに埋められた渦巻文様、組紐文様、幻想的な変形した動物文様は、確かにギリシヤや、ローマの美術を見慣れた目には、異形であり、そのためケルトの文化を異端とする見方がヨーロッパにはありました。

ケルトの意匠について、寄生樹の枝のように絡み合った模様は水、蛇は地、鳥は風、雷文は火、と物質を形成する四大要素を象徴するという、かなり説得的な説があります。蛇が地と水を、鳥が天空と太陽を象徴することは多くの宗教学者が認めていることですから、これを敷衍すればケルト美術は蛇と鳥の宇宙の対立概念をその中心思想としていると言っても差し支えないかも知れません。

この「鳥と蛇」を対立概念とする思想は、グデア王の台付杯の意匠に見られるようにメソポタミアに生まれましたが、その後長い時間をかけてケルト人の間に広がって行きました。そしてローマの文化がアルプスを越えて北西ヨーロッパに入っていく前のヨーロッパは、メソポタミアの影響を受けたケルトの文化に覆われていたのです。ヨーロッパでは、ケルトの美術を奇異な目で眺め、異端として斥けた時代もありましたが、実は、彼らが好むと好まないにかかわらず、ケルトの痕跡は彼ら自身の心の奥底に深く沈殿しているのです。そして、それが長い歴史の間には、マグマのように地底から地表に噴出する現象が現れます。錬金術のオカルト的神秘主義などもその例と考えられます。

ケルト文化は、ヨーロッパ大陸やイギリスでは、身近なものとしてとしては、必ずしも好意をもって迎えられませんでした。逆にアイルランドでは、ヨーロッパの基層文化としてのケルト文化の継承者を自分達アイルランド人であるとして、精神的支えにさえしているのです。

第四章 東方への伝播

これまでシュメールの文化が西の方に及ぼした影響を見てきましたが、それでは東の方はどうなっているでしょう。先ずインドに関してですが、グデア王の台付杯の絡み合った二匹の蛇のモチーフは、インド・ヨーロッパ語族がやっ

て来るはるか前にインドで受け入れられていたと云われています。石板が寺院の中庭やバンヤン樹のような大木、池の端など立ってかけられている蛇石ナイガカルと呼ばれる石板には、こうした蛇の意匠が彫られています。ティグリス、ユーフラテス河の河口とインドは数日の航海で行ける距離にありますが、当時お互いに文物の流れがあったと考えられています。例えば、インドの文字であるブラーミー文字は、紀元前八百年頃のセム語の書体を元に作られたものだそうです。

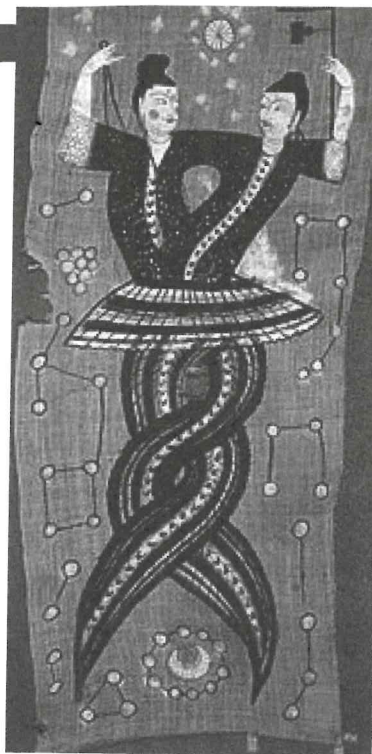
中国はどうでしょう。驚いたことに、シュメールの思想は中国の建国神話にも見られます。中国の新疆ウイグル自治区トルファン出土の絹画には人体蛇尾の伏羲、女媧がちょうどグデア王のゴブレットの絡み合った二匹の蛇のような格好に描かれています。言い伝えには、伏羲、女媧の兄妹が結婚してのち、その子孫が皇帝を立て漢民族の祖先となったというものがあります。この伝説の伏羲、女媧の蛇のシンボルは、メソポタミアから陸路により中国に伝わったものと考えてもよいと思います。

このようにメソポタミアで生まれた「鳥と蛇」の思想は、その後の東洋と西洋の文明の形成に無視できない影響を与えてきたのです。

明治から大正にかけ日本でも「蛇が絡んだ杖」——このシンボルはよく使われていました。ヨーロッパ経由の意匠

を取り入れたのです。今は取り外されましたが、銀座の街灯のデザインがカドゥケウスであったようです。今でも銀座四丁目の角にある和光の正面上部の壁に見られますし、また日本橋の三越の玄關上にも付いています。カドゥケウスは、一橋大学の校章にも使われていると友人が云っていました。これは、ヘルメスの伝令の役が發展して商業のシンボルと見なされるようになったからで別に不思議なことではありません。

医療の神アスクレピオスが持つカドゥケウスの杖は、医療のシンボルとして用いられています。例えば、米国の陸軍の聖路加病院に行けば、礼拝所の床や建物などに見られますし、その便箋にも印刷してあります。



伏羲と女媧の蛇神

第五章 インドに蛇石ナイガカルを求めて

ニューデリーの中心街、コンノート・プレースから放射状に発するジャンパス・ストリートに二六階建てのル・メリディアン・ホテルがあります。ニューデリーでは、ここに泊まることにしていますので、炊飯器やコシヒカリ、佃煮などが入ったトランクをこの十年間ずっと預け放なしにしています。ホテルの近くにインド国立博物館があります。時間をもてあましている時などに、自宅の近所を散歩するような気安さで、出かけるにはちょうどよい距離です。

博物館には、インダス川流域の遺跡の出土品を陳列したインダス・ギャラリーがあります。ここに学芸員のシャルマ博士が働いています。インダス文明を専門とする考古学者です。先月初旬、南インドに出発する前にシャルマ博士を訪ねましたが留守でしたので、帰ったら再訪する旨伝言を残して翌朝ジェット・エアでゴアに発ちました。

インダス文明は、インダス川流域に栄えた文明で紀元前三千年頃からその萌芽が見られ、二千二百年頃に最盛期を迎え千七百五十年頃に衰退に向かいます。インダス文明は、それより千年ほど古いメソポタミア文明とは海の道により交易が行われていた、あるいはある種の交流があったと考えられています。ところが、私が博物館の陳列品を何度見ても、前章「グデア王の台付杯」で述べたようなメソ

ポタミアで生まれた絡み合った二匹の蛇のモチーフが見つからないのです。

交易が発達していたのは、運搬物のシールとして用いた凍石製の印章が多数発掘されているので分かります。それに刻まれた意匠は、その半分以上が一角獣と呼ばれる牛、こぶ牛、二本の角を持つ牛など、牛を表わす文様で、そのほかにも象、犀、鹿、羚羊、山羊、鳥、魚、ワニなどが含まれますが、蛇が見られないのです。これは、実に不思議なことです。

そのことをシャルマ博士に指摘しましたところ、「蛇はあります」と断言されて、発掘された印章の写真を示されました。しかしその写真に写った蛇の姿は、コイル状の蛇の文様でまことに頼りないものでしたが、確かに絡み合った蛇のようには見えました。

蛇石は南インドに広く分布しているのに、北インドにはほとんど見られません。メソポタミアとの交流は、インドアス川流域ばかりではなく、アラビア海に面する南インドとも広く行われていたからではないでしょうか。南インドへの旅は、そのようなことが、少しでも感じられればそれだけでよい、という軽い気持ちで動機の一つになっています。

ゴアは一五一〇年ポルトガルに占拠されて以来、ポルトガルの東方進出の拠点として栄えてきました。しかし、オランダ、イギリスの勢力が強まるにつれ衰退していきま

す。そして、一九六一年の暮れにポルトガル軍はインド海軍に惨敗を喫し、長い植民地としての歴史は幕を閉じました。オールド・ゴアのボム・ジェズ教会には、今でもフランシスコ・ザビエルのもといわれる遺体が安置されています。銀製の棺に納められて祭壇の高いところに安置されていますが、下からガラス越しにその顔が透けて見えるようになっていきます。近くには、インド航路を発見したことで有名なヴァスコダガマの名から取った外航船用のヴァスコダガマ港があり、この港から今は日本向けに鉄鉱石が出荷されています。植民地時代の面影を残す町並みやヨーロッパ的な雰囲気が高まるのか、ヨーロッパからの観光客が多く、中には分譲のリゾートマンションを持っている人もあるようです。

町をはずれると、ホテルやマンションが椰子の林の中に見え隠れし、小さな教会が椰子の木陰に次から次と見えてきます。住宅もやはり椰子林の中にあり、そのほとんどの家の敷地に石の台座があり、その上に十字架が立っているのに気づきました。十字架ですからお墓ではないかと思いたくなりますが、それはお墓ではないようです。ミヤンマーやタイやバリ島にも家の傍らに小さな屋敷祠を置く風習があります。ゴアの十字架にもそれに似た雰囲気があります。もしかすると、これは改宗前の屋敷祠の名残かもしれません。

ゴアでは、クリスチャンとヒンズー教徒とはほぼ同数で、両方ではぼ八割を占めているようですが、海岸に近ければ近いほどクリスチャンが多いような感じですが。ホテルから七十キロ以上離れた森林の中にヒンズー寺院を訪ねたところ、町から外れるに従ってクリス教の教会が減り、ヒンズー寺院が増えてくることでもそれは察することができます。鉄鉱石を運ぶトラックの列を避けながら山道を行き、露天掘りの鉱山を通り過ぎ、二時間以上走った頃ようやく目的地のムブディ・スルラ寺院の入り口に着きました。

十一世紀から十三世紀に建造された石造りの小さな寺院が数百年の歳月を耐えて残っているのは、大変珍しいこととに違いありません。孤立した辺鄙なジャングルの中にあつたので、イスラム教やキリスト教の影響が及ばず、破壊などもされずに残されたということのようです。

来る前から予想していたように暗い堂の奥にシバ神を象徴するシバ・リンガが納められていました。そこには、花や椰子の実が供えられています。そして入り口の左右の壁には蛇石が立って掛けられていました。蛇石がいつ納められたのか、またいつから納める習慣が始まったのか、その年代などは寺を管理する人が近くにいないので全く分かりません。また、仮に管理人や僧侶がいても、あまりにありふれたことでしょうから、特別に興味を抱いて調べることがはしないに違いありません。従ってそのような知識の

ある人はいないでしょうから、運転手に言っただけで帰途につきました。

帰りにゴアの州都バナジのゴア州立美術館に寄りましたが、植民地時代の訪問台を見て驚きました。数人がその周りに腰掛けられるように大きなものですが、そのテーブルには、それにふさわしい堂々と迫力のある驚が彫られているではありませんか。そして驚はそのがっしりした脚でしっかり大きな蛇を掴んでいるのです。メソポタミアのグデア王のゴブレットの「鳥と蛇」の思想は、姿は異なってもギリシャからヨーロッパ経由でこのゴアに達しているのです。そのようなことを考えると、蛇石の蛇は、どこかに片割れの鳥を置き忘れてきたのではないかという気持ちがしないでもありません。

インド人の友人に紹介されて来たので、ここに着くまでは気づきませんでした。このリーラ・パレス・ホテルは、インドでも最高級といわれるホテルでした。歩くと砂がキュッキュと鳴る遠浅の人里離れたビーチにこのような豪壮なホテルを建てても経営が成り立つのでしょうか。日本では考えられないことです。

ホテルは、最近建設された新しい建物です。エントランスは高い石柱に支えられた巨大な石造りの建築で、円柱にはマカラが彫刻されています。そして、大理石の広い床の片隅に、どこかの寺院から移したというガルダの銅製の

像が飾られていました。等身大の大きさと、立派な物です。普通の寺院では滅多に見られないものですから、いずれ由緒のある物だと思いました。このホテルの広いコリダーには、巨大な銅製の鳥の像、シバ神の乗り物のナンディー牛の銅像も飾られています。九ホールのゴルフコースを備えた広大な庭園には熱帯の花が咲き乱れています。歩いていけるのはヨーロッパばかりですが、シバ・リンガが景の中に上手に配置されていたりして、インドにいるのだということがやっと実感できるような仕組みになっています。

ゴアの空港から東南にジェット機で一時間ちよつと下った内陸部にカルナータカ州の州都バンガローがあります。アジアのシリコンバレーといわれるコンピュータ産業の中心地です。ホテルから迎えに来た車の運転手が森喜朗元首相の名を突然口にしました。何でも森首相はインターナショナル・テク・パークの落成式に出席したのだそうです。世界の大国で日本の首相ほど国際的に知名度が低い首相はないと思っていましたが、森首相は違いました。運転手までがヨシロー・モリと呼ぶのは正直驚きました。バンガローは、インドで五番目に大きい都市で最近めざましい発展をしているということですが、緑が多い落ち着いた高原の町に見えました。

子供の時から憧れていたコモリン岬へ行くための中継地として一泊しただけのことで、この町には取り立てて見るべき遺跡や寺院はないようです。運転手はインターナショナル・テク・パークを見学に行くようにしきりにすすめますが、そんな工業団地を見たとしようがないので、ごく普通の町の寺院ですが、地元でブルテンブルと呼ばれている寺院とクリシュナ寺院を見に行きました。

ブルテンブルの暗い堂の中に入ると巨大なグラナイトに彫られた牛の像が目の前に迫って来ます。シバ神の乗り物である牛が信仰の対象になっているのです。ここでは庭のバンヤン樹の近くには列を作っている数体の蛇石が印象的でした。しかし、二匹が絡み合った蛇は少なく、ほとんどは単体のコブラが立ち上がっている姿に彫られています。クリシュナ寺院に着いたのは、そろそろ日が暮れようという時刻、ちよつとお祈りの最中でした。ここは、ヴィシュヌ派の寺院です。善男善女が群れをなしていて本堂に近づけないので、仕方なく隣の部屋に入ってみました。部屋には人気がなく、高い天井の壁の上部に、フィレンツェのミュージアムで見たようなルネッサンス風の絵が描かれているのに気づきました。蛇のアナンタ・シエーシヤの背に横たわるヴィシュヌ、ヴィシュヌのへそからは蓮華が空に向かつて伸び、蓮の花の中にブラーフマンが出現する——

ヴィシュヌが創造者であるブラーフマンを創造する有名なヒンズー神話から題材を取った絵です。クリシュナはヴィシュヌの八番目の化身とされているのですから、ヴィシュヌ

ヌを宇宙の最高の原理とする神話に基づく絵があるのは分かるのですが、よく見ると、これはレリーフで、その上に洋画の手法で明るく色付けされたものでした。どうも妙な気分させられます。

本堂から離れて道路に面した楼門（ゴブラ）は天を目標にした塔となりそこには数知れぬ神像が神のバンテオンを創り出しています。最近になって修復した新しいものですが、ら、ぬめぬめしたマネキン人形が無数に妍を競っているように見えないことはありません。楼門を遙かに仰ぎ見てもガルーダを見つめることはできませんでしたが、門の外に出ると歩道に四面の尖塔が立っています。その尖塔の一面にガルーダがいました。その反対側にハヌマン、そしてその他の二面にコンチ・シエル（法螺貝）とチャクラ（法輪）がそれぞれ彫ってありました。これらの神像や持ち物から、この塔が建てられた背景には明らかにラーマーヤナ物語があることが想像されます。ちなみにラーマは、ヴィシュヌの六番目の化身とされています。

この寺院では、蛇石を見つけないことはできませんでした。蛇石は、土着性の強いシバ神と結びつきやすいものようです。西方の民族がインドの地に侵入した時に持ってきたのでしよう、外来性が強く感じられるスマートなヴィシュヌ神と蛇石は、やや不似合いな感じもしますので、これはこれでいいのでしよう。

バンガローから七六〇キロ、ジェット機で二時間南下すると、ケララ州の州都ティルヴァナンタプラムに着きます。この町はトリヴァンドラムと呼ばれていましたが、最近の復古的な動きに押されてティルヴァナンタプラムという名前に変えられました。ティルヴァナンタプラムを日本語に直すと、「蛇の都」という意味になるのだそうです。

ヒンズー教の聖典ブラーナによると、この世界の地面の下には七層からなる地下の世界があります。ヴァーユ・プラーナは五層、六層、七層は美しい寶石で身を飾った蛇の楽園であると記述しています。ここには夜は昼ともに光に溢れた美しい自然があり、池には蓮華が咲き、空には鳥が囀っています。ティルヴァナンタプラム（蛇の都）は、おそらく竜宮城のように絢爛豪華な楽園をイメージしたヒンズー教的な名称なのでしょう。プラーナは四世紀から一三世紀頃にかけて少しずつ編纂されたものです。

コモリン岬は、ティルヴァナンタプラムから九〇キロ、車で約一時間半という距離です。今では、ケーブ・コモリンと言っても通せず、カニヤークマリと言わなければなりません。インド洋、ベンガル湾、アラビア海が交わる海を見渡せるインド亜大陸最南端の岬です。ヒンズー教徒の聖地とされ巡礼者の姿も見られますが、それよりも朝日と夕日が同じ海から見られる場所だということから、バスで観光客が押しかけてくる観光地としての印象を受けました。

コモリン岬の名は「聖なるコモリ」としてギリシャ・ローマの史書にも出てくると言われます。現在もティルヴァナンタラムの空港からは、アラビア、アフリカ方面との空路は広く開かれています。中近東に出稼ぎに行く人たちはケララ州に多く、イラク戦争で帰国する人で空港はごった返しているとニューデリーで聞いてきました。空港の混雑は、それほどではありませんでしたが、私たちが日本で考えるよりもはるかにアフリカ、中近東に直接結びついているのが実感できました。

コモリン岬から三〇〇キロほど北上したところにフォート・コチンという港町があります。この町にたまたま泊まったホテルが気に入ったので、しばらく滞在しました。オランダ人が建てた邸宅を改装した小さなホテルですが、今はドイツ人がオーナーをしています。ゆったりと広い部屋には古い面などが飾ってあります。ホテルの前は広いグラウンドで、その横の道を行くと一〇〇メートルほど先に聖フランシス教会があります。ヴァスコダガマはここで亡くなり、遺体は最近リスボンに移されたそうですが、墓碑がここにあります。

フォート・コチンは砦としてポルトガル人が建設した町です。緑の木陰には洋風の大邸宅が静かなたたずまいを見せています。五〇メートルもある巨大なバンヤン、マンゴー、シャワー・ツリーなどに混じって、ポルトガル人が古くからインダス川流域を越えてインドのもっと南の方ともあったと考えてもよいのかもしれませんが。私たちから見ると、ヨーロッパ人もアラビア人もどちらもアジア人とは違って彫りが深い顔をしています。ドラヴィダ人が印欧語族と混血したのでインド人は彫りが深い顔をしているのだと思いがちですが、それだけではなくセム族のアラビア人の血が混じってそのような容貌になった人たちがいるのも確かです。

ケララ州は、西ガート山の手前でタミルナドゥ州とは対照的に雨が深い州です。ヒマラヤ山脈東北山麓のアッサム州とここは、世界でも最も雨量が多い地域だそうです。乾燥気候のタミルナドゥ州に傑出した寺院や遺跡が多く残っているのに、高温多湿のケララ州は木材に恵まれたために木造寺院が主流となりました。木造建築は容易に作れますが、腐食しやすいので、長く保存しにくく、したがって寺院建築に見るべき物が無いと言われてきました。この気候では、遺跡も腐食して土に帰り、あるいは海に流されて跡形をなくしてしまうので、なかなかその証拠が見つけないので、実際は文明の先進地に地理的に接近していたケララ州には意外に進んだ文明があったのかもしれない。

こう見てくると、蛇石ナガカルの思想は、インダス文明を經由したばかりではなくて、直接メソポタミアから南インドに伝

南米から移植したレイン・ツリーが五人がかりで手を廻してやつと届くような大木に育っています。

海には、写真撮影のスポットで有名なチャイニーズ・フィッシュング・ネットという五、六人掛かりで操る仕掛けの魚網がずらりと並んでいます。ヴァスコダガマがインドを発見する前のこと、すでに中国人の漁師がここでこの仕掛けを使っていた。その後は中国人を駆逐したアラビア人がそれを利用した、と側の立て札に説明してありました。客はほとんどヨーロッパ人ですから、イタリー・レストランなどと看板を掛けた小屋に、そこで捕った魚を買って持つていくと料理してくれます。でき上がった料理は砂浜に置いて白いテーブルカバーの掛かったテーブルで食べることにあります。夜は、キャンドルが赤く灯ってここがインドとは思えない光景です。漁師は、イスラム教徒でフセインやアラファトなどとアラビア人の名前を持ち、客引きにはキリスト教徒もいます。

ティルヴァナンタラムにも、ホテルの四、五軒先の小さな寺院に蛇石ナガカルがありました。このゴアにも寺院だけではなく村の四つ角にあつたバンヤン樹の陰にも蛇石ナガカルがありました。

漁師にアラビア人の血を引くイスラム教徒が多いことや、コモリン岬が有史以前からギリシャ世界に知られていたことを考えると、やはりメソポタミアとの直接の交流があったと言ふことも十分考えられそうです。そうすると、海岸沿いに航行する船だけではなく、遠洋航海のできる大きな船も海原を渡って行き来したのでしょうか。学者ではありませんので実証する方途もありませんが、蛇石ナガカルを崇めるのは、ヒンズー以前に遡る土着的な習俗であり、それはメソポタミアからインダスを経ずにストレートに伝わった「絡んだ蛇」の思想を受け継いだものであるとますます強く考えるようになりました。

ニューデリーに帰って、シャルマ博士を訪ねました。ガルーダやナーガの話をするうちに、「日本で、縄文式土器を見たときに、驚きました。この文様は蛇のコイル（絡み合った蛇）だと直感しました」と面白いことを言われまじいものです。「それでは、縄文文様の起源はメソポタミアと考えてもいいのですか？」とお聞きしますと「十分に可能です」と答えられました。シャルマ博士の言われることに従えば、「絡み合った蛇（蛇のコイル）」は、当然メソポタミアからインドに流入しています。ただ、インダス文明を経てと言ふことになりませんが、その点だけは私が旅で得た感想とは違ふようです。

縄文式の土器についてはほとんど知識がありませんので、何とも言えませんが、シャルマ博士と同じような主張の学者が日本にいるかもしれない。学会の状況がどうか

は知りませんが、何事であれ、想像の翼はいくら羽ばたかせてもそれは自由です。如何にもはやされた理論であっても、今や全く相手にされなくなつたものもあります。どんなに有力な学説であつても、今では明らかに誤りというものもあります。日本語のタミル語起源説という常識を破つた仮説とダブらせると、シャルマ博士の直感も案外正しいのかもしれない。

シャルマ氏は、その後、ベナレスヒンズー大学教授、同大学インド博物館館長にされましたが、インドで出版した「Garuda in Asean Art」では共著者となつてもらい、その後「一般社団法人 国際ガルーダ学会」を創設するときに、副会長になつていただきました。また、前述の東京外語大学名誉教授、奈良毅氏には理事に就任していただきました。最近では、シャルマ氏に『釈迦の道巡礼記』を書くにあつて、その道筋を同行してもらつております。

第六章 ヘルメスの翼

上野の東京国立博物館の「アレクサンドロス大王と東西文明交流展」に「釈迦出家出城」のレリーフがパリのギメ美術館から出品されているので昨日見て来ました。ギメ美術館は、ダイアナ王妃の自動車事故が起きたアルマ橋の近くにあり、パリでは、時間があれば覗くことになっていますが、今度も数日前に行つて来たばかりでした。ギメ

美術館には、カンボディアやベトナムのガルーダや仏像、ガンダーラや中央アジアの仏像、中には翼を生やした仏像も陳列されています。ギメでは、写真撮影は許されているので何度も通つてその都度写真撮つてきました。東京国立博物館では写真を撮ることなどとてもないことのように、パキスタンのニモグラームで出土した紀元二―三世紀の作品の「釈迦出家出城浮彫」はガラスケースの中に大事に納められていました。

「釈迦出家出城」は、ゴータマ・シッタールタが宮廷での王子としての華美な生活を捨て、仏陀として初めての一步を踏み出した仏生譚の中の有名な場面です。舞台は、現在のネパール南部ルンビニ付近にあつたカピラヴァストゥ城——ゴータマ・シッタールタが生まれ育つた土地です。ここは奥深いインドの地で、人々はインドの衣装を着ていたはずですが、ところがこの浮彫に表わされた像は、何故かギリシヤ風の衣装を身につけて、しかも、太子を囲む人々の中にはギリシヤのオリュンポス山の十二神の中のヘルメスや夜の女神ニユクス(ローマではノクス)が見えています。ギリシヤから遠く離れた土地で発掘された仏教美術がギリシヤの神で表現されているのを眺めて、改めて違和感を覚えらる方も多いと思われまふ。しかも浮彫の横に置かれた解説に「ギリシヤ風の衣装に身を包んだ人物はヘルメス＝毘沙門天」として、ギリシヤ神話のヘルメスが仏教の毘

沙門天と同一神であるという記述がありますが、これもなかなか納得し難いのではないのでしょうか。

しかし、ギリシヤの神々の彫刻は、「釈迦出家出城」が特別な例ではなく、今のパキスタン、アフガニスタン、タジキスタンなどから多数出土しています。それは何故なのでしょう。この疑問に答えるために、少しでも役に立つかも知れませんが、ギリシヤ風仏像の生まれた時代背景を概観してみます。

この時代から五〇〇年前の紀元前四世紀のインドには、ガンジス川の中下流でナガラとかプラと呼ばれる都市国家が分立していました。小アジア半島からインドス川の西側までは、ペルシヤのアケメネス朝が広大な領域を占めてインドとギリシヤ世界を阻んでいました。ペルシヤと接したギリシヤ北方の辺境に、マケドニア王国があり、そこでは、紀元前三五九年にフィリッポス二世が即位し、弱体化していた王国を再興し、国力が充実してくると、外へ発展するエネルギーが蓄積されていきます。それを担つたのがその子のアレクサンドロス大王です。アレクサンドロス大王は、ペルシヤを席卷し、インドス川の西方までその版図を広げました。しかし、インドス川を渡りパンジャブ地方を平定しましたが、ガンジス川までには達することができず、紀元前三三三年、病に倒れました。

アレクサンドロス大王の時代からローマのエジプト征服

(紀元前三〇年)までをヘレニズムと言い、コイネーギリシヤ語と呼ばれるギリシヤ語が共通語として使われ、地中海世界からアフリカ北部、中近東からインドに達するまで広くギリシヤ文化が各地の文化と接触融合し、国際的性格を持った文化が生まれました。しかし、アレクサンドロス大王の時代に一気にギリシヤ文化がインドまで広がつたのではなく、それ以前からギリシヤ人の移民は長い時代をかけて進んでいて、ギリシヤ人の移動と共に少しずつ移植されていったのでしよう。その証拠にギリシヤ人の傭兵が万単位でペルシヤ軍に編入されていたことが挙げられます。それだけの傭兵を支えるギリシヤ人のコミュニティが小アジア半島には数多くあつたのではないのでしょうか。

アレクサンドロス大王の死後の混乱に乗じて、マガダ国の発展を引き継ぎ、その占領地を平定したのが、マウリア朝の始祖チャンドラグプタです。その後、前三世紀の半ばにアショーカ王が即位し、マウリア朝の版図はガンジス川の下流域にある王都のパトナーから、ガンダーラ、今のアフガニスタンのガンダハールに達しました。(西アジア(中東)の文明の発祥から現代まで、「南アジアの歴史」大利貴彦編著)

マウリア朝のアショーカ王は宗教に対しては、寛容な態度をとりましたが、自分自身は仏教に改宗しました。そしてその広大な領土にはアショーカ王の法勅と云われる石柱

と磨崖の碑文が各地に数十カ所も残っています。仏教の教えは、広い領土に染みこむようにインダス川を越えて広く西の方に広がっていききました。

紀元前二世紀半ばギリシャ人のメナンドロス王が仏教に改宗したことをみても、多くの人が仏教を信ずるようになったのが察せられます。(「ミリンダ王の問い——メナンドロス王と高僧ナーガセーナとの教義についての問答」)

関西大学法学部の堀野司教授は、「新約聖書は仏生譚から取り入れた箇所が多く見られる。また、キリストは弥勒菩薩(未来仏)であった」と禁断の仮説を立てておられますが、しかし仏教の西方への普及を物語るものとして考えられないこともなさそうです。(「仏教とキリスト教」第三文明社レクルス文庫)

釈迦の没後、長く仏陀を人の形で表わすことはありませんでした。死後に到達するべき理想の境地である涅槃では、人間の肉体的存在は消滅し、精神的存在としての魂を人の形で表わすことは不可能と考えられていたのです。

デリーから南に飛行機で一時間ほどのところにポパールの空港があり、そこからタクシーで四五キロ北に行くとサンチーの仏教遺跡群があります。ここは、特に釈迦の生涯とは関係のないところですが、もともとはアショーカ王の王子がスリランカへ布教に行く際立ち寄った僧院があった場所だったようです。そのせいかどうか、わたしが訪れた

スター教を最優位とし、他の宗教の自由に認めたという王国の宗教事情を反映しているものと思われれます。

この頃、王都のあるガンダーラと、ガンダーラから直線距離で九〇〇キロ南東のヤムナ川河畔のマトウラ、この二つの遠く離れた場所で別々に仏像(仏陀の像)が作られるようになりました。仏像の制作が始まったのはガンダーラが先かマトウラが先か——ポストン美術館のクマールラスワームは、マトウラ起源説を主張しています。デリーから車で三時間ほどの距離のマトウラの博物館には、何度か訪れましたが、館員はインド人としての情からか口を揃えて、仏像はマトウラで作られたのが先だと云います。それでは日本ではこれについてはどう見ているかといいますが、インドとは異なり宮地昭氏や高田修氏に代表されるようにガンダーラ起源説が大勢を占めています。

アレクサンドロス大王の死後、現在のアフガニスタンの北部からタジキスタン、ウズベキスタンを中心とする一帯にギリシャ人の国家であるバクトリア(前二五〇年—前一九九年)が独立しましたが、この国ではギリシャの神のヘラクレス信仰が特別に強かったと云われます。バクトリアの金銀貨には片面に王の肖像、片面にヘラクレスやゼウスの像が彫られています。バクトリアにギリシャの都市があったことは、アフガニスタンとタジキスタンの国境にあるアイ・ハヌムの遺跡の発掘でも明らかで、この遺跡はN

ときには博物館にスリランカ仏教協会の垂れ幕が下がっていました。

ここにはアショーカ王が建立した八つの大きなストゥーパ(仏塔)があります。ストゥーパの前に立っているトラナ(鳥居のような形をした塔)に仏生譚が彫っており、その「降魔成道」の図には菩提樹、「尼連禪河の渡河」には河の中に長方形の板があるだけで仏陀の姿はどこにもなく、信者はそれぞれ菩提樹と長方形の板に向かって合掌しています。

このように仏像のない時代を経て五五〇年後に、ペシヤールを王都とするクシャーン朝にカニシカ王(一四四—一七一年?)が即位します。カニシカ王は熱心な仏教徒で、仏經典の第四回目的結集は王の治世下に行われました。カニシカ王の仏舍利器には仏陀の像が、王の貨幣の意匠にはポッド(仏陀)という銘がある仏像が表わされています。

しかし、王が仏教を信仰していたとしても、ペルシヤ系の民族である大多数のクシャーン族の人々が信仰していたのはゾロアスター教だと言われます。別の金貨の意匠を見ますと、表にはゾロアスター教(拜火教)の神聖な火焰が両肩から立ちのぼっているカニシカ王の像が彫ってあります。しかし面白いことに金貨の裏面にはギリシャの風の神アエモスやゾロアスター教の太陽神ミトラ、インドの破壊神シバが刻まれているのです。この金貨の意匠は、ゾロア

HKで放映されました。

バクトリアの北部に接するガンダーラからも、ゼウス、ヘラクレス、ヘルメス、ディオニュソス(バッカス)、アポロン、エロス、アフロディテといったギリシャの神像が多数出土しています。先に述べたカニシカ王の仏舍利器には、カニシカ王の像と銘の外にアゲシラオスという名のギリシャ人がカニシカの寺院を造る監督をしたことなどが記されています。これから察せられるように当時多数のギリシャ人の芸術家や建築家が宮廷に雇用されていたようです。

クシャーン族には、神格化した帝王の像を献納するという伝統があり、ヘレニズムの影響を受けたクシャーン朝の風土は仏像を生み出す要件を充分満たしていたと思われるます。神像を見慣れた人々に仏陀のイメージをギリシャの神々と同じような人の形にして布教するのは分かりやすく効率的であったのでしようし、そうでなくても、仏像を創り出すエネルギーは、人々の中から自然にわき上がった情念だったのかも知れません。

こうして仏陀の姿は、人の姿をした仏像という形で表わされるようになりました。仏像の起源説については、その後、ギリシャよりもローマの影響を強調する考え方が二十世紀の半ばには盛んになり、ローマ帝国とインドとの、主として海の道による交渉によるものまで幅広い議論

が行われています。

しかし、いずれにしても仏陀のイメージの創造において西方の影響が大きく、それが直接的にはローマだとしてもローマ以前にはギリシャがあるわけですから、難しい議論は専門家に委ねるとして、我々としては、ここは取りあえずギリシャの影響が大きかったと考えておいてもよいでしょう。

さて「アレクサンドロス大王と東西文明交流展」に出品されている「釈迦出家出城」のレリーフをもう一度見てみましょう。

アレクサンドロス大王と東西文明の交流展の図録の「出家出城図浮彫」には、「仏伝（仏陀の生涯）の一場面。太子として何不自由ない宮廷生活を捨て、求法の道を選んだシッダールタ太子が城を出て行くところを表わす。登りくると太陽神の正面鏡の図像を採用することで、太子が仏陀（無明を打ち砕く存在）へ一歩踏み出したことを示す。大地から半身を起こして蹄音がしないように馬脚を持ち上げているのは、インドのヤクシャ。太子の左手にあつて、短柱に頬杖をついている女性は、舞台となったカピラヴァストウの守護女神。このような柱身の短い柱はギリシャ美術で神々の脇によく描かれている。都市女神の上方でシヨールに風を孕ませる女性は、ギリシャの夜の女神ニユクス（ローマではノクス）。シヨールは夜の帳を表わし、太子の出城

が夜半であったことを示す。太子の右手前に立つ、膝上丈のチュニックとマントというギリシャ風の衣装に身を包んだ人物はヘルメス＝毘沙門天。ギリシャ神話では、漆黒の闇の中、死者の魂を冥府に導くヘルメスが、この場面では闇夜に城を出た太子の前導を勤めている、左手には弓、右手には矢ないし矢筒を持つ。T、M」という解説がついています。

解説文の中で気にかかる「ヘルメス＝毘沙門天」とは、本当のところ、一体どういう意味なのでしょう。それには、まず、毘沙門天（仏教）、クベーラ（ヒンズー教）、ヘルメス（ギリシャ神話）がどういう神なのか大まかなことを知っておいた方がよいでしょう。

仏教で「毘沙門天はインド古代神話中のクベーラのことであるといわれ、護法神の一で四天王ないしは十二天のうち北方の守護神であるが、独立して福德富貴の神としても尊崇され、後世七福神の一ともなる。広く仏法守護の役割を表わすために武装憤怒形をとるが、例外（裸形など）も見られる。（「仏像図典」佐和隆研編）」とあります。

ヒンズー教で、クベーラは、財宝の神であり、ラクシヤーサ（羅刹）の王でもありますが、また、カイラーサ山中に住み、北方の守護神ともされています。マハーバーラタの伝承によりますとブラーフマンの孫、ラーマヤナでは曾孫とされていて、その他ストーリーにもそれぞれ違いはあ

りますが、ランカー（現在のスリランカと言われる）の羅刹王のラーヴァナとは兄弟ということでは一致していません。ラーヴァナがラーマ王子に攻められて滅ぼされる（ラーマヤナ物語）以前にクベーラは既にラーヴァナに破れてランカーを去っていました。クベーラの別名をヴァイシュラヴァナと云い、音訳して毘沙門天、意識して多聞天と漢字では書くのです。

ギリシャ神話によりますと、ヘルメスは、嘔吐きと泥棒の天才として生まれました。生まれたその日には、もうアポロンの牛を盗んで食べてしまっています。怒ったアポロンのご機嫌をとるために、これも捉えた亀で作った豎琴を弾いたところ、アポロンはその豎琴をことのほか気に入って、その豎琴と黄金の杖と交換しようと言ひ出します。豎琴と黄金の杖を交換したところで、アポロンは音楽の神になり、ヘルメスは牧畜、泥棒、旅人、商売人の守護神になりました。オリュンポスの十二神の中に加えられることになり、付き羽根のついたカドゥケウスの杖です。羽の生えたサンダルを履き、カドゥケウスの杖を持ち、風のように速く走り、神々の伝令役を務めるのもヘルメスです。

本来信仰とは、心に関わる問題です。そのため仏陀を仏像というイメージに表わし、その仏像を介して仏を念ずることは特別なことではないと思われまふ。ところが、

ガンダーラ地方のラニガド遺跡などを見ると、人々は挙つてストーパ（仏塔）を寄進し、寄進する行為によつて救いを求めた形跡があります。厳しい修行をしなくても救われるという分りやすい教えが人々の心を動かしたのでしょう。アフガニスタンのバーミヤンで発見された古文書の研究などによつてカニシカ王の頃に大乘仏教への改革が起こったことが分つてきています。こうして、「釈迦出家出城」の浮彫を生み出す土壌ができていきます。釈迦滅後、ずっと後になって仏教を信する人々はヘルメスを道案内として描いたのはありますが、ヘルメスの属性をクベーラというヒンズー教の神に重ね合わせたものと思われまふ。

ヘルメスは、生まれたときから各地を飛び回ったが故に旅の神ともされていますし、また冥界への道案内、冥界から死者をこの世へ引き戻す役割も負っています。古代ギリシャでは、牧場や西域の境や道標としてヘルメスの柱がちこちに建てられたそうです。こういうことをもつても、ヘルメスが釈迦出家出城の浮き彫りに登場したのは理解できません。

ガンダーラ地方は、仏教の発祥の地からは直線距離にしても一五〇〇キロ以上離れた辺境の地にありますが、文物の交流ということから見ますと、中央アジアと地中海世界、遊牧地帯とインド洋との中心に位置しています。「仏教は生まれたままの姿で中央アジアに出たのではない。ガ

ンダーラというインドの特別な玄关口で化粧直しをした」と桑山正進京大名誉教授は云われています。この言葉は、外観から見て、「仏陀という身体に仏像という衣装を着せて」という意味にとってもよいかも知れません。仏陀と云う形而上学的な実体があつて、仏像はあくまでもそのイメージに過ぎないというちよつと極端かもしれませんが、そう云うこともできそうです。

ギリシャ風な衣装をまとつたクベーラは、仏陀のお供をしてガンダーラから天山南路または北路沿いに中国に達しました。中国では、クベーラの別名であるヴァイシユラヴァナを漢訳して毘沙門天、多聞天と名前を変えたただけではなく、中国の武将姿に再び衣替えさせられて日本にやつて来ました。この文章を書いているちよつとその時に妻の母親が亡くなりました。庄内平野の最上川岸の妻の実家の葬儀に参列しました。初七日の仏壇の左側に東方持国天、南方增長天、右側に西方広目天、北方多聞天と四方を守護する四天王を漢字で表わした幟が下がっていました。インドで生まれたクベーラはこうして仏法を護るために日本の庄内平野にも来ているのです。

しかし、クベーラに移されたヘルメスの翼は、遙かに遠く、第二章「ゲデア王の台付杯」で述べましたように二千数百年前のメソポタミアのゲデア王のゴブレット（台付杯）の図柄——絡み合った二匹の蛇の両脇に獅子の頭を

持った鳥のような動物が配されています——のモチーフに淵源があるのです。また、ヘルメス自身でさえギリシャの神に取り入れられる以前に中近東で生誕したという考え方もあります。奈良国立博物館の兎跋毘沙門天立像の冠の正面に鳳凰文といつて鳳凰の文様がついています。この文様はヘルメスのカドウケウスの杖についていた翼が、クベーラに移され、それを受け継いだものだといわれています。こうして、固有な文化と信じてきた地域文化も、実は地球規模では大きな広がりを持つていくということが実感できるのです。

そして、ゲデア王のゴブレットの鳥がギリシャ、インド、中国を経由して日本に渡ってきたように、前章「蛇石を追つて」で述べましたように、蛇の方はインド洋を横切り南インドから更に海の道を通つて縄文時代の日本に辿り着いています。

第七章 龍と鳳凰

ある朝、ふと思ひ立つて狛犬を見に近所の八幡宮まで行つて来ました。桜はもう葉が出始めていますが、道筋の住宅には山吹や蘇枋や海棠の花が今満開です。神社の鳥居をくぐるとすぐに一對の狛犬が左右にありました。さらに進むと、その前にまた一對の狛犬が拜殿を守るように置かれています。八幡宮を下るとすぐに緑の多い遊歩道を通つ

ていて、その道を五〇〇メートルも歩くと御宿神社という土地の氏神様があります。そこにも同じように二対の狛犬がありました。こうして家からほんの半径五〇〇メートルの中に狛犬が八体もあり、周囲の風景の中にすつかりとけ込んでいます。

狛犬は、平安中期に中国から伝わつたと云われます。当時、清涼殿に口を開いたものを獅子として左に置き、口を閉じたものを狛犬として右に置いたのが、始めだと伝わっています。今では、狛犬と獅子は一つのものとなつて狛犬と呼ばれるようになりました。

中国でも日本の狛犬と似た獅子の像を見ることができません。アルバムを繰ってみますと、五年前に北京の紫禁城を見学した時の写真にその獅子の像が写っていました。ライオンの原型に近い金ぴかの派手なもので、右の前足で珠玉を押さえ、左の前足で獅子をあやしています。近くにいた人に聞くと、珠玉は世界を統治するということをし、子どもは子孫繁栄を意味しているとのことでした。珠玉と獅子を両方の前足で押さえた一對の獅子が前面左右に配置されているのが紫禁城ですが、わたしの家の近くの神社では、片方の狛犬が右前足で珠玉を、もう片方は同じく右前足で自分の子を押さえています。

狛犬は、高麗犬とも書かれるように、日本では中国から渡来した中国古来のものだと信じられていました。しか

し、狛犬は、日本生まれのものではないように、中国起源のものでもありません。狛犬のルーツは中近東にあります。獅子（ライオン）は、アフリカとインド北西部などの動物であつて、中国には棲息しないことからそれは分ります。インドではアシヨカ王（紀元前三世紀）の獅子の石柱柱頭が有名ですが、これも西方ギリシャやペルシアの影響が強く見られます。

狛犬のルーツが中近東にあることは、比較的容易に受け入れられそうですが、龍についてはそうはいかないかも知れません。しかし、実はわたしはここでその龍のことを云いたかったので。龍と云えば中国の皇帝の象徴でもありますし、純粹に中国オリジナルのものだと固く信じられています。しかし、果たして龍は中国人の純粹な発明といえるのでしょうか。わたしはこの考え方に疑問を持っています。

陳舜臣氏の「中国発掘物語」は、旧石器時代の北京原人の項からすぐに新石器時代後期として仰韶文化から始まります。仰韶文化は、青銅器時代の殷王朝が紀元前一六〇〇年頃から始まるとされていますので、取り敢えず紀元前五千年を前期として、紀元二五〇〇年頃その頂点に達し、二千年頃まで続いたものと考えることにします。

仰韶文化は、一九二二年、スエーデンの地質学者アンダーソンによって黄河中流域の河南省北部の仰韶で発見されました。仰韶では、彩陶（彩文）土器が見つかり、農耕が行

われた跡がありますので、中国北部の最初の農耕がここで始まったと考えられました。その後の調査によって同じ特徴の遺跡は、千カ所も発見され、黄河上流域の甘肅省西部まで広がっていることが分かりました。

これより前、一九〇四年、西トルキスタンにおいてR・バンバリがアナウ文明を発見しました。この発見は、西トルキスタンにおける初期農耕文化の成立と、それが紀元前七千年にメソポタミアで始まった農耕と牧畜とを基本とする文明が伝わって来たことを初めて明らかにしました。この文化伝播論の根拠になったのが、彩陶土器です。

アンダーソンは、仰韶での彩陶土器の発見に基づいて中国の農耕文化は、はるか西のメソポタミアで始まったものが伝わって来たのだとする中国農耕文化の西方起源説を唱えました。現在、世界で多くの人が西方起源説を支持しています。それに反対する人も数多くおられます。彼らは、仰韶文化は中国独自に起こったものだとします。特に中国の学者たちがそうです。

陳舜臣氏は、その著書で「仰韶文化には黒陶も出土している。アンダーソンはその黒陶を見逃している。彼には考古学の知識がない。彩陶土器は、放射性炭素測定値によると西より東の方の方が古い。むしろ彩陶土器の東方起源説の方が自然だ」と云って、西方起源説に反対し、東

方起源説を主張しています。

しかし、わたしはこれに反して、西方起源説が正しいものと思います。仰韶文化の西の果ての甘肅省西部、そこはもう砂漠・オアシス地帯で西域の入口です。彩陶文化は、西からはパミールの西まで来ています。西域の東の端と西の端に彩陶文化が来ていることを考えると、これが連続したものと考えるのが自然というものではないでしょうか。その中間地帯である東トルキスタンとタリム盆地について、もつと多くの発掘調査が行われればそれが明らかにするはずですよ。

今のところ多くの歴史書は仰韶文化から始まっています。ところが、近年、遺跡の発掘により新事実が続々と発見されています。まず、第一に仰韶文化よりずっと古い新石器時代の遺跡が発掘されていることです。次にこれら遺跡の発掘により、中国文明発祥の地は、従来考えられていた黄河流域ではなくて、中国の外縁、内蒙古自治区から遼寧省にかけてではないかと考えられるようになってきました。東日本と同じく、アジアのナラ森林帯に属する地域ですが、ここに縄文土器とよく似た紀元前六千年紀の土器も発掘されました。この遼河流域は、中国中央部を通らずに内蒙古から天山山脈の北側の草原（ステップ地帯）を通じて、西トルキスタンに直接繋がっています。この地域に生まれた新石器時代の高い文化を内蒙古赤峰市の紅山遺跡

（紀元前四千年）からとって、広く紅山文化と呼ぶこともあります。

この紅山文化の遺跡からは、埋葬された人骨の胸元から猪を模した玉が発見されています。ちよつとそうも見えないのですが、中国の学者はこれを龍と呼んでいます。しかし、この周辺では、鹿と猪に鳥の頭を持った龍と見えないこともない文様の土器も発見されています。またここでは、人間と猪を同時に埋葬した遺溝も発見されています。このような事例から鹿や猪などはトーテムとして畏敬されていたことが分かります。そして、いくつかのトーテムを融合して一つの空想上の動物を創りあげるといふ発想の原点が見られます（北進一著「豚龍形玉器の文化史」自然と文化第六四号紅山文化と縄文文化）。

龍が西方起源でないかという推測は、殷の時代以降になつて、はつきりしてきます。「殷の時代には、甲骨文、青銅器、馬車、天文、曆法など政治権力と深く関係する都市文明はメソポタミアに起源、中国に伝えられたと考えられ、特に殷墟の王墓に埋葬された四頭立ての馬車の構造はメソポタミアの馬車と同一であり、馬と馬車をつなぐ方法もまったく変わらない」と荒川絃氏は「龍の起源」で述べています。

また、殷の時代になつて忽然と青銅器時代が出現した点について、どうも不自然な感じがします。それまでに

この地方で青銅器が作られた兆候は全くなく、突然に非常に発達した状態の青銅器が使われるようになっていきます。黒陶土器を作ることを通じて火の使い方を学んだ人たちが青銅器を独自に創り出したという可能性もないわけでもありませんが、これもやはり彩陶土器と一緒に西域から伝わった外来のものではないかと考えた方がより自然ではないでしょうか。

甲骨文についても、シュメールの楔形文字にヒントを得て作られたのではないかという考え方があります（I・J・ゲルブ「文字の研究」／テリアン・ドゥ・ラクーベリー「シナ文明の西方起源論」）。シュメールでは絵文字の段階から楔形文字の使用にいたるまで五百年もの年月を要したのに、甲骨文では最初からかなりの程度に抽象化された体系だったというのがその言い分になっています。これが、前六世紀から前七世紀に使われ始めた鉄器時代に入ると、鉄という字をその頃金偏に異国人を表わす夷を組み合わせて鉄（鉄）と書いたことなどもあって西方の影響はもつと明確になつてきます。

殷代（紀元前一六〇年―前一一〇〇年）の婦好の墓から出土した玉製の龍を見ると、内蒙古で発掘された新石器時代の龍と云われているものの形に似ているのに驚かされます。それが周、春秋、戦国時代、秦と時代を追うに従って進化して、前漢の時代にほぼ現在のイメージの龍が完成し

ました。湖南省（紀元前二世紀中葉）の馬王堆から出土した副葬品の彩絵帛画の龍の絵には天上界に日・月、蛇身人首像、扶桑樹、青龍などが描かれ、月の中には鳥まで描かれています。（池上正治著「龍の百科」新潮選書 参照）

中国は、中国という国が他の地域から孤立して存在したのではなく、ユーラシア大陸の東にあつて長く他の地域からの影響を受けて来ました。中原の王朝は漢族によって独占されてきたのではなく、いくつもの民族によって交代されてきました。草原（ステップ地帯）の遊牧民族に征服されたこともありましたが、しかし、何といつても西域の政治的、経済的、文化的な影響は計り知れないものがあります。

この地域を北、中央、南と横切りにしますと、
 (1) 遼河・紅山文化——天山山脈の北側の草原を通り西に繋がる

(2) 黄河文明——天山山脈の南側、コンロン山脈の北側にあるタリム盆地に延びる所謂シルクロードを通じて西に繋がる

(3) 長江流域の文明——ヒマラヤ山脈の南側を通じてインド北部に繋がる

に分けられるかと思われまふ。（註／わたくしは、これらの道を通つて龍と鳳凰の思想は西から東に伝播したものと考えています）

(1) は遊牧を、(2) は農耕と牧畜を基本とした、とも

起原」NHKブックス参照

河姆渡遺跡には、また二羽の鳥が五輪の太陽を抱きかかえて飛翔する図柄が彫られた象牙の彫り物が出土しています。このような鳥が太陽を抱えた意匠は、長江流域ではあちこちに見つかっています。この地域の先住民であつた苗族には、鳥、宇宙樹、太陽に対する強い信仰がその風習に残っています。紀元前二千年の気候の寒冷化によって黄河地域の漢人が南下することによって苗族は、山地に逃れて少数民族化し、一部は日本や台湾に稲作技術と共に渡つていったというようなことが言われています。（萩原秀三郎

著「稲と鳥と太陽の道」大修館書店参照）

稲作にとつて太陽の日照は重要で、そのため太陽の運行には大きな関心が寄せられます。太陽は鳥が運ぶものだと考えられ、夜明けと共に刻を告げる雄鶏は尊崇の対象とされました。現在の典型的な鳳凰の形を見ると、雄鶏や鶴や鴛鴦の各部分が合成されていますが、羽根が孔雀のものなのが印象的です。インド原産の鳳凰孔雀の羽が取り込まれていることを考えると、やはり鳳凰も西方の影響の下に形作られていったものだと思われまふ。

雲南省の大理市は洱海（エルハイ）という美しい湖のほとりにあります。ここは、七世紀から一三世紀にかけて繁栄した南詔大理国の都でした。ここに三塔寺という三基の仏塔があります。もともとは崇聖寺という大きな仏教寺院内にあり

に乾燥した風土に順応した文化ですが、これに対して、
 (3) は、照葉樹林文化帯に属し、稲作が始まる前には、昼なお暗い湿潤な森の生活を基本とした文化であるところが、(1) (2) との大きな違いです。（中尾佐助著「栽培植物と農耕の起源」岩波新書参照）

照葉樹林文化帯では、クリ、トチ、ドングリ、シイクズなどの木の實、ワラビ、サトイモ、ヤマイモなどの根菜、ヒエ、シコクビエ、アワ、キビ・オカボなどの雑穀、イネなどが食べられてきましたが、人口が増加するにつれてイネが主要な食物となつて来ます。日本では弥生時代にイネが伝わり、水田が広がるにつれ森林がなくなつて、今では神社の照葉樹林は裏山に残るだけのようになっています。中国でも同じような状態です。

最近、長江流域での遺跡の発掘が急速に進んで、新しい発見がたくさんありました。浙江省河姆渡（カボト）遺跡では、紀元前四千年代の地層から大量のイネが出土しています。湖南省の玉蟾岩（ギョクセンガン）遺跡では紀元前一万四千年前のものだとされる稲粒が発見されたこともあり、従来のアッサムまたは雲南省ではなく、この地域を最も古い稲作地だと主張する学者も現われてきたようです。稲作の起源についてはそう簡単な問題ではないようです。しかしながら照葉樹林地帯の主要な穀物がイネであることには、変わりありません。（田中正武著「栽培植物の

ましたが、度重なる戦火や地震でことごとく失われ今ではこの三基の仏塔が残されるのみとなつてしまいました。

一九七九年に仏塔の大修理が行われた際に、中から唐宋時代の文物が六千種以上も出てきました。その中に塔頂から発見された大鵬金翅鳥と呼ばれる金属製の像があります。像は、鳳凰が火焰を背負つた姿をしています。この金翅鳥というのがガルーダの中国名です。照葉樹林文化帯でトテムとして信仰の対象とされた鳥が仏教思想の下にガルーダとされたのはこの例で明白です。

前に湖南省（紀元前二世紀中葉）の馬王堆から出土した副葬品の彩絵帛画に「天上界に日・月、蛇身人首像、扶桑樹、青龍などが描かれ、月の中には鳥まで描かれていた」と述べましたが、実は、この図には寒冷化に伴つて南下して来た龍に象徴される黄河文明と鳳凰に象徴される長江文明がドッキングした思想が表現されています。（安田喜憲著「龍の文明・太陽の文明」PHP新書参照）

さらに蛇身人首像は、第二章の「グデア王の台付杯」で述べましたように、人体蛇尾の伏羲、女娲はその淵源がメソポタミアにあり、「扶桑樹」は各地に伝わる神話や伝承の中に見出される「生命の樹」、「宇宙樹」のことであることは明らかであり、これもまたメソポタミアに関連しています。龍と鳳凰の二元論の考え方は、西側から伝わったものと考えられます。猪龍や鶏、水鳥のトテムが今のよう

な形に変わってきたのは、メソポタミアで生まれた「鳥と蛇」を宇宙の対立者または二大要素と捉える思想、そしてその後、インドでナーガとガルダとして仏典の中に再編成された伝承が原動力になっているものであるとわたくしは想像いたしております。

ところで始めに述べました紫禁城ですが、その中の保和殿の北側の石段に白大理石に九頭の龍が彫られた紫禁城最大といわれる彫刻がはめ込まれています。しかし、この長さ十七メートルの白大理石の彫刻は、単なる彫刻ではなく、輿に乗った皇帝だけが登ることのできる階段なのです。両脇についた階段を上がって行くと、龍は、中国の皇帝の力の淵源であり、皇帝の象徴であるということが確かに実感されます。また、「紫禁城の『紫』とは、皇帝の象徴であった北の空にある紫微星のことであり、王宮の宮殿群は紫微星に向かう中心線に沿って整然と建てられ、皇帝の玉座はこの中心線上に置かれた。王宮の構成は皇帝と天との密接な関係を示す。全ては、天の意を受けて天を治める天子であることを強調している」という荒川紘氏の著作「龍の起源」の一節を思い出します。そして、さらに考えを進めると、紫禁城のこの構図は、天頂に北極星をいただいてそびえ立つスメール山を宇宙軸とする古代インドの宇宙地理論を代表する須弥山説にそっくりなのに気付かされるのです。

だが、アピ・ヴァールブルグもまたニーチュエと同じく精神を病んで、一九二一年にスイスのクロイツリンゲンの精神病院に入院することになります。一九二三年に退院しましたが、その時のヨーロッパ文明の揺籃の地である古代ギリシャの神話との共通性を論じた、「クロイツリンゲン講演」は、狂気の縁から生還した証言として有名になり、『蛇儀礼』のもとになったのです。アピ・ヴァールブルグは、ニーチュエと同じく伝統的なギリシャ観を通り越して、その先にある世界に視線を向けていました。

私たちは芸術造形を語るときによくアポロンの、ディオニュソスのと言う言葉を使います。アポロンはギリシャ神話における太陽神であり、ディオニュソス（ローマ神話ではバッカス）は、ブドウ酒に酩酊し、陶酔、豊穡を象徴する神とされています。ギリシャ神話のこの二神からとったアポロンの、ディオニュソスという相反する概念が一般に認められようになったのは、ニーチュエの『悲劇の誕生』からとされています。アポロンのとは、太陽が燦々と輝く地表にあるように明るく、理性的・合理的・客観的・計画的であり、近代的な雰囲気を持った概念です。これに反して、ディオニュソスのとは、地下に潜んだ暗さであり、最初に通じる情動に突き動かされた刹那的な熱狂性、非合理性を象徴する——つまり非近代性を指す概念であると考えるよいと思います。

終章 人はなぜ「鳥と蛇」に特別な思いを寄せるのだろうか

二〇一三年、私は『蛇とニーチュエ』を出版し、霞ヶ関で出版記念会を開いていただきました。二〇〇名近い方々が出席されて盛況な会となり、シルクロードの文化交流史研究の権威者前田耕作先生にお話をお願いしました。冒頭で「蛇を追い詰めようとしたら、頭が狂ってしまいますよ」と話されると、会場は笑いに包まれました。しかし、すぐに難解なアピ・ヴァールブルグの著書『蛇儀礼』の解説に移りました。分かりやすく解説されましたが、それでも難しかったかも知れません。

アピ・ヴァールブルグは、一八六六年、ハンブルグで銀行を営む裕福なユダヤ人の家に生まれました。精神を病んだニーチュエが亡くなる四、五年前の一八九五年から九六年にかけて、アピ・ヴァールブルグは、アメリカを旅行し、ニューメキシコ州、アリゾナ州では、プエブロ・インディアン（インディアンの宗教儀礼を体験し「鳥と蛇」がインディアン（インディアンの宗教儀礼を体験し「鳥と蛇」がインディアン）の神話的表象の中で中心的な役割を果たしていることに気付き、主に「蛇」に着目しました。一九世紀のヨーロッパの知識階級は静的・知的な秩序を目指す特徴をギリシャ的なものとしてとらえて教養の基礎としてきたために、これに反した無秩序で狂騒的なインディアン（インディアンの宗教儀礼などは、対極的なものとして関心を示すはずはなかったのです。

鳥は太陽の側であるから、アポロンの、蛇は地底の側であるからディオニュソス的といつてよいのかもしれないが、しかし両者は実は後ほど述べるように生物の進化の過程においては同種と考えてもよいのです。

ニーチュエは、『ツァラトストラかく語りき』の中で「鳥と蛇」を愛らしい道化者として常に傍らに侍らせ話し相手としております。一方、それらをアピ・ヴァールブルグはおぞましい存在として忌避しているように見えます。二人は、一見、相反する態度をとっているように見えますが、「鳥と蛇」に対する関心は他の動物とは全く次元が違う、拗さに思えます。

これは何故でしょうか。『蛇儀礼』に付されたウルリヒ・ラウルフの解説に引用されたブラジ・ムントクーアの引用を見て衝撃を受けました。この引用文の中にその解答があるように見えました。それは私がなんとなく感じていた憶測を裏付けるようなものでした。早速、ニューヨーク州立大学アルバニ・プレスから出版されたブラジ・ムントクーアの『The cult of the serpent』を手に入れて読み始めました。蛇のシンボルの画像や例証が豊富で優れた書物でした。ガルダについても述べられていました。蛇については日本における民俗学的な書物はありますが、世界的な視野で述べられたこのような本の日本語訳が欲しいと思いました。

『蛇儀礼』の翻訳者三島憲一氏は、ムントクーアはこう書いているとして、「蛇崇拜の動機は、それ以外の動物崇拜の理由とは異なるところにある。蛇が持つ魅力と怖さは、蛇の毒に対する素朴な恐れのみ由来するものではないはずである。それ以上に、原初的だが、霊長類の進化の過程に根を持つ、もつととらえがたい、心理的な刺激シエーマによっている」と訳しています。蛇崇拜の動機は霊長類の進化の過程に求められると云うのです。

一笑に付されるかも知れませんが、敢えて言いますと、私は「鳥と蛇」崇拜の動機を、ムントクーアが霊長類や人類の進化史の過程に求める考え方に言及したのに、驚愕しましたし、敬服もいたしておりますが、必ずしも満足しているわけではありません。以前から私は、「鳥と蛇」を追求するには、二億二五〇〇万年から六千五〇〇年まで続いた地質時代の中世期まで遡って考えた方がよいのではないかと、とうとう思っていたからです。その頃は地球の気候は温暖で、陸上には蘇鉄などの裸子植物が生えて、恐竜が繁栄していました。空には翼竜が舞っていました。同じ頃、私たちのルーツである哺乳類も誕生しておりましたが、地上に跋扈する恐竜や空を舞う翼竜のような爬虫類から遁れるように細々と生息していたのです。

その時の記憶が今に残っているのでしょうか。二十万年頃前から私たちの直接の祖先ホモサピエンスはアフリカを出

最近、日本の幼児や子供達は恐竜が大好きのようです。これは「鳥と蛇」について知ってもらいたいチャンスだと思っています。NHKの「恐竜プロジェクト」の著書、ダイヤモンド社刊『恐竜VS哺乳類』の帯に、「六六〇〇万年前、巨大な天体の衝突により恐竜は絶滅した。あれほど地球上で栄華を極めた恐竜が何故絶滅し、なぜわれわれ哺乳類は生き残ったのか——それを解く鍵は、恐竜と共に生きた一億五千万年の年月の中に隠されている。「ヒト」は恐竜がデザインしたといっても過言ではないのだ」という文章が書かれています。

六五〇〇万年前メキシコ東部に小惑星が衝突しました。太陽の光が届かず地球は寒冷化し、恐竜は絶滅します。しかし、それから時を経て太陽を取り戻した地球には、光が満ちあふれ、被子植物が発生し野には蝶や蜂、花から花へ飛び回る昆虫の世界が現れました。恐竜の時代には小さな鼠のように物陰に隠れ住んでいたほ乳類は大型化し、枝分かれして霊長類も出現し、今ではホモサピエンスと呼ばれる私たち現生人類は最も進化した生物として生態系のいちばん高いところに君臨しています。しかし、原初につながる鳥や蛇を畏敬する感情は、私たちの下意识よりさらに奥深く体内に組み込まれているようです。そしてその故をもって「鳥と蛇」の表象は宗教祭祀に使われ、また国家の権威を象徴する造形として利用されたと考えられそうです。

て地球全体に拡散しましたが、その時に彼らは「鳥と蛇」を表象とする造形や民話を伴っていったはずですが、私は、人類史に興味を持ち人類学を勉強していきました。実際に地球の果てといわれるマゼラン海峡の先にあるフエゴ島のウシューアイアにも行ってみました。フエゴ島は、ホモサピエンスが到達した最後の土地だといわれています。フエゴ島に到着するまで人類は途中の各地で岩絵やそのほかの文様にも「鳥と蛇」の造形を残しております。

心理学の学術用語として「トラウマ」と言う言葉があります。この「トラウマ」はもともとギリシャ語で、「傷」という意味ですが、激しい物理的な外傷が後遺症を伴うように、過去の強い心理的ストレスが後々まで精神に障害をもたらすということをあの有名な心理学者フロイトが発見しました。その際に用いられた「trauma」という用語がドイツ語の心理学用語となったものだと思います。

フロイトの発見したトラウマは、個体に限定された用語です。私は、「鳥と蛇」の表象や造形が人類の大移動の際に地球上に拡散したことを証拠に、鳥と蛇を畏れるトラウマは、人類発生の際にはすでに存在し、さらに地質時代の中世を生き延びた哺乳動物にまで遡るのではないかと考えているのです。すなわちトラウマを個体だけではなく種にまで広げて考えることもできるのではないかと考えています。

それが私の「鳥と蛇」を追う旅で得られた結論だったのですが、あまり大きな命題として立ちほだかつてきたので、一人ではこれ以上前に進めないでおります。

(四人) 102号より転載



やまもと えつお

山本悦夫

台湾台北市生まれ
九州大学法学部卒
米国フロリダ大学経済学部大学院卒
インドバナレスヒンズー大学美術史科
博士号審査員
(株) インターナショナルセイヤ会長
研究分野: ガルーダ、鳥と蛇の神話
“Garuda in Asian Art!”, “Indian
Classical Art of Gupta Age”
『インドに行こう』、『蛇とニーチェ』
など
学会: (日本学術会議協力団体) アジア文化造形学会会長

